『策略家？』

　温泉、温水プール作成にて、人一倍の肉体労働と地の魔術を存分に発揮して見せつけてから、メリッサ・ガードナーは発案者で監督をしているレイザ・インダーに近づいた。
「レイザくん伯爵さんの親戚だよね？　マテオ・テーペの登頂許可が欲しいの。会わせてもらえない？　今回の労働対価として！」
　突然の、なんら作業とは関係のない発言に訝しげな顔をするレイザ。
「マテオ・テーペにどうしても登りたいの！」
　メリッサはこの仕事へ協力を申し出た理由を、包み隠さず話すのだった。
　彼女の趣味はクライミングと原石探しであり、外国人の彼女がここに訪れていたのはマテオ・テーペ登頂のためだったと。
「マテオ・テーペはいつから立入禁止でなぜ近づいてはいけないの？
　山がもたらす物はたくさんあるのに。宝石、鉱石、粘土、石炭に岩塩に、ほかにもいろいろ。それが今有益な物だったらもったいないと思うのよ」
　熱心に登頂への想いを語るメリッサを、レイザはただただ訝しげな顔で見ていた。
「な～んて、私は結局のところ登ってみたいだけなんだけどね。
　伯爵さんの身内にでもなれたら手っ取り早そうなのに……後添えは無理でもねんごろになるのも一つの手段だと思うのよ」
　メリッサがレイザを肘で小突く。
「出会いに協力してよ」
「……」
　レイザは無反応である。
「はっ、もしかして、レイザくん奥様筋の関係者？　コネがないなら一緒に考えて！　お・ね・が・い」
　メリッサは上目使いでレイザを見て、ナイスバディな体を近づけ……ようとしたが、飛び退かれた！
「そういうのは、生徒がいない時にしろ」
「あ、うん」
　レイザはメリッサと一定の距離を置くと、服の隙間から覗く彼女の豊満な素肌に視線を滑らせた。
　見定めるような、卑猥さを感じない視線だった。
「俺は、アシル・メイユール伯爵の従甥にあたる」
「じゅ、獣性？」
「死んだ俺の母親と今の伯爵が従姉弟だった。俺の家は、メイユール家の前の領主の――王国の時代からあそこを管理している」
「おおー！　なんか偉そう？　つまり伯爵さんと血繋がってるんだよね。それじゃお願い～っ。人一番働くから口利きして！」
　レイザは怪訝そうに眉を寄せる。
「なんで伯爵に会いたいんだ」
「だから、マテオ・テーペに登りたいから！　なんで登りたいかって趣味だからよ。趣味に理由がいる？　レイザくんにも止められない衝動はあるでしょ？」
「私利私欲の為にコネと色仕掛けで統治者に近づいて、伯爵に連なる者や騎士団に目をつけられ一般人に蔑まれるのと、お前のそのスキルを駆使して自己責任で勝手に登るのとどっちがリスクある？」
　レイザがメリッサを睨みつける。
「つまりお前は別の目的で、伯爵に近づこうとしている。君主を誘惑して懐柔し、意のままに操ろうとする真の狙いはなんだ」
　鋭い目で発せられたレイザの言葉に、メリッサはぽかーんとする。
「いや違うし、ホントにちゃんと許可を得てマテオ・テーペに登りたいだけ！」
「狙いがないのなら、タダのアホ女か？　俺にアホ女を世界の統治者様に紹介しろと！？」
「ひどい、ひっどーい、レイザくんッ！　でもね、何と言われたって、退くつもりはないんだから。労働だけじゃ足りないのなら、私にできること何でもするから！　協力してー！」
　メリッサは、つかみかからんばかりの勢いでレイザにつめよってくる。
「アシルさんへの紹介は断る。だが、マテオ・テーペに登る協力なら、できないこともない。……お前が、俺の為に働くのならな」
　レイザは瞳を煌めかせ、そしてふっと笑みを浮かべる。
「立入禁止になった理由は良く分からないが、入山を管理する人員もなく、どこかのアホがクライミングに挑んで行方不明になっても、捜索に割ける人員なんていないからじゃないのか？」
「なるほどー。ろくに準備もせず、実力もないのに登ろうとする人いるものねぇ」
　レイザはメリッサのことを言ったつもりだったが、メリッサは自分のことだなんて思いもしない！
「それで、どんなふうに協力してくれるの？」
「俺がサポートにつく。落ちそうになったら風で押し上げる」
「ん？　レイザくんって火の魔術師だよね？　風起こせないでしょ」
「起こせるさ。もしもの時には責任を持って火災旋風でお前を頂上まで運んでやる」

「わー、炎で風起こせるんだ〜……って、ちょっとまって、それって体焼けるよね？　丸焦げになるよね！？」
　メリッサがそう言うと、レイザは笑い声を上げた。
「そうだな。こんがり焼けて美味そうになったら、食べさせてもらう」
「うわー、レイザくんって性格悪いね」
「お前の頭ほどじゃない」
「レイザせんせー！」
「ここどーするんですかー！」
　子供達の声が響いてきた。
　レイザとメリッサは、可笑しそうに笑いながら温泉へと戻っていくのだった。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
メリッサ・ガードナー